
銀魂×ハヤテ！～血桜忍物語～

銀風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂×ハヤテ〜血桜忍物語〜

【Nコード】

N1370Q

【作者名】

銀風

【あらすじ】

時は江戸初期、悪を脅かす一人のくノ一がいた……。彼女の名はヒナギク……。血桜忍として悪からは恐れられていた……。そんな彼女が壮大な野望に立ち向かう！

第0幕（前書き）

壮大？な忍者物語、始まるでゴザル！

第0幕

戦国の世が終わり、徳川が天下を統一し江戸幕府を開いた。これにより人々の生活も変わっていった。だがこの世は平和にはならない、必ず『悪』が存在するのであった。

「ひっひっひ・・・お代官様・・・これは黄金のお菓子でございます。」

とある宿の部屋にて、あやしい雰囲気の中、男二人が会話をしていた。中からは小さい笑い声が聞こえる。

「おお・・・腹黒屋よ・・・お主も悪よのオ・・・。」

「いえいえ・・・お代官様ほどでは・・・。」

「ひっひっひ。」

お代官は黄金のお菓子が入っている箱を開けた。中からは小判がいくつも少しだが光を放っていた。小判を見てお代官は笑った。だが上から音がした。

「何奴」

シュッ！その音とともにお代官の首が斬られた。

「お・・・おだいか」

ズブッ！腹黒屋は腹に違和感を感じた。腹を触ったら血がべつとりと付いていた。その直後、彼は音もなく床に倒れた。

「・・・任務完了・・・。」

彼らを刺したのは桃色の髪の色をした齢16ぐらいの少女だった。彼女はすぐに天井に上がり素早く外へ出て行った。

「任務ごくりっ、これは報酬だ。」

昼の時刻、とある茶屋にて彼女はある男から小判を貰った。

「どうも。」

「ふっ、次も頼りにしているぞ。ヒナギク。」

男はそう言った後、茶の代金を払いその場から離れて行った。彼女の名はヒナギク。どんな依頼も必ずこなすという凄腕の忍者である。彼女は血桜忍として各地の重鎮から恐れられていた。

第0幕（後書き）

本編は次の話からです、あとかなり不定期掲載になりますのでその辺は頭に入れておいてください。

第1幕（前書き）

作者「本編開始！」

新八「僕の出番がありますよね！」

マリア「私の出番はどうか？」

作者「・・・・・・・・・・・・・・・・」

新八「おい、何黙ってんのアンタ？」

マリア「何か言ってください・・・・不安になります！」

第1幕

ヒナギクは一枚の手紙を手に山の道を歩いていた。手紙には次の依頼が書かれていた。次の対象は某藩の老中、裏腹黒伊予である。とくに大物ではないが依頼者の為やってやろうと思ひヒナギクは依頼者との待ち合わせ場所である一野山の茶屋へ向かっていた。ヒナギクが茶屋に着き辺りを見回した。中には依頼人と思われる人物がいた。彼に近づきヒナギクは小声で呟いた。

「依頼人・・・長谷川泰三ですね。」

「ああ、そうだ。アンタが血桜忍かい？」

「ええ。」

「そうか・・・このままで頼む。アンタはとにかく裏腹をやつてくれ。前払は払う。」

長谷川はこっそり小判をヒナギクに渡した。

「確かに受け取ったわ・・・。」

「後払いは奴を始末してからだ・・・この先にある歌舞伎町つとこの宿にいる。始末してからそこに寄つてくれ。」

「はい。」

ヒナギクは茶屋を出てすぐに某藩へ向かった。

数日後、ヒナギクは某藩に着いた。城下町は大した騒ぎもなく平和に思えた。ヒナギクは宿をとり裏腹について情報を集めた。情報によると裏腹はいたって普通の老中だがこの藩の藩主である焼野原真はかなり若く、彼のサポートを全面的に行っている事と言う。そしてもう一つ、この藩主は徳川の世をあまり好んでいないという事。まあ依頼だからさつさと始末してしまおう。ヒナギクはそう思った。だが後にヒナギクはある壮大な事件に巻き込まれていくのであった。

夜中、ヒナギクは黒装束を着て城に忍び込んだ。なるべく見張りは殺さず、何とか天井裏に潜入する事が出来た。各部屋を天井から見て行った。部屋の中には侍女たちやサボっている見張りがいたが裏腹らしき人物はいなかった。城の頂上。遠くの方で笑い声が聞こえた。

「いや〜ご協力ありがとうございます！これで打倒徳川にまた一歩近づきました！」

その声を聞きヒナギクは驚いた。徳川を・・・倒す！

「フッフッフ・・・これでまたあの方の野望が近付きましたね！」

あの方・・・誰だ？ヒナギクの脳裏にこんなことが浮かんだがすぐに仕事モードに切り替えた。ヒナギクは手裏剣でロウソクの灯を消し下の二人がひるんでいるところを狙って下に降りた。

「だ・・・誰だ！」

「誰か、明りを。明り」

ズシャ！ズバァ！暗闇の中、斬撃の音が響いた。

「が・・・だ・・・誰だ？」

魚目は動こうとしたが首に何かが当たった。刀だった。

「動かないで。」

少女の声がした。ここで彼は察した。今自分は生命の危機にあるという事を。

「今から話す事に正直に答えなさい。」

「な・・・裏腹様は！あの方は」

「私が殺した。」

「うっ・・・」

がちや。刀が動く音がした。

「あなた・・・徳川に何をしようとしているの？」

「し・・・しらん！」

ちやき、刀が動いた。どうやら騒いだら殺すと言っているみたいだ。

「騒いだら首をはねる。」

「ひ・・・」

「質問に答えなさい。」

「し・・・しらん。本当に知らない。私はただあの人の命令で」

「あの人って誰？」

「う・・・うう・・・助け」

ズシャァ！騒ごうとした魚目は首を切られた。

数日後、ヒナギクは長谷川のいる宿にいた。

「依頼ごくろうさん。これは報酬だ。」

「ええ・・・。」

ヒナギクは小判を受け取ったがどこかもやっとしているのだ。

「どうした？」

「いえ・・・そう言えばあの男が徳川を暗殺するとか・・・。」

ヒナギクの言葉を聞き長谷川が動きを止めた。

「そ・・・そうか・・・。じゃ・・・また。」

そう言って長谷川は宿を出て行った。

「・・・怪しい。」

そう呟くとヒナギクはひそかに長谷川の跡について行った。

長谷川の跡をついて行って数日、ヒナギクは江戸に近い藩についていた。

「あの人・・・老中かしら？」

ヒナギクは呟いた。その時だった。背後から何者かの気配を感じ

た。

「誰！」

「流石血桜忍だな。」

後ろを見たら白髪の男性が立っていた。

「誰・・・あなた？」

「俺は三千院藩、直属の忍、坂田銀時だ。」

「・・・そう・・・。」

ヒナギクは背中刀をとうとうとしたが銀時の手がそれを邪魔した。
「なっ！」

「まア待て、俺の話を聞け。俺はテメーとやり合うつもりはない。」
「え？」

「俺の跡について来い。」

そう言われたのでヒナギクは銀時の跡について行った。

その後、三千院城にて。

「まさか俺が後をつけられてたとは・・・。」

「だからアンタはマダオなんだよ。」

姫らしき人物と長谷川がこう会話をしていた。姫はヒナギクより
年下で、珍しい金髪のツインテールをしていた。

「ははは・・・姫様、そう言っではマダ・・・長谷川さんがかわい
そうですよ。」

「何でアンタもマダオ扱い？」

長谷川が姫の側近らしき人物にこう言った。

「で、漫才やっている暇があったら何か私に話してくれない？自己
紹介とか。」

ヒナギクはこう言った。その後、長谷川達はヒナギクに自己紹介
を始めた。

「俺はこの藩の老中の長谷川。悪いな・・・依頼の時は素性を隠し
て。」

「いいのよ、誰だって私に依頼する時は素性を隠すから。」

「で、このお方がこの藩の姫、三千院ナギ。隣にいるお方は側近で
ありナギ姫の夫である綾崎ハヤテ。」

「よろしく。」

「ええ・・・で、あなた方は徳川と何のつながりがあるの？」

ヒナギクの質問にナギはこう答え始めた。

「徳川とは私の亡き母から交流があったんだ・・・我が国は武力が

無く、弱かったんだ。だが徳川が私達家族を守ってくれて・・・そこから交流が始まったんだ。」

「そうなんだ・・・私も初めて聞いたわ、そんな事。」

「徳川は私たち以外にもこう言った弱い国を守るためなるべくその国に関する情報は言わなかったんだ。」

「そうだったのね。それより本題に入るわ。私を雇った理由は何？」

ヒナギクの質問に誰も答えなかった、だがナギがヒナギクのそばへ寄りゴニョゴニョと話し始めた。

「実は大きい声で言えないが実は徳川を暗殺しようとする奴がいるんだ。」

ナギの言葉を聞いてヒナギクは確信した。どうやら徳川暗殺を行おうとする輩がいる。宿での長谷川の戸惑いも少しは理解した。

「そう・・・。」

「・・・なあ、このまま続けて依頼を受けてくれるか？」

ナギがこう言った。そしてハヤテも続けてこう言い始めた。

「もし・・・もし徳川が暗殺されたら・・・また世の中は戦国の世となってしまうす！・・・それで罪もない人々が殺されていく・・・。」

ハヤテは涙声でこう言った。ヒナギクはハヤテの言葉を聞きながらある事を思いだしていた。

安らかな川の音、風により木々の葉の音が響き渡る。桜の村、何も変哲もない村だがヒナギクにとってはここは大切な場所・・・故郷である。まだ戦国の世、幼いヒナギクがまだそんな事を知らずにこの村で平和に過ごしていた・・・だが彼女が花畑へ行っている間、悲劇は起きていた。見知った顔の村人の無残な死体があちこちらにある。建物も崩壊、あるいは火をつけられ燃えている。幼いヒナギクはこの光景を見て絶句し腹の奥底から泣き叫んだ。そして彼女は決意した。忍となり故郷を滅ぼした奴に復讐をする・・・そして戦国の世を終わらすと・・・その瞬間、血桜忍が生まれた時だっ

た。

「ヒナギクさん？聞いてますか？」

ハヤテの声を聞き我に返った。

「ああ・・・スミマセン・・・故郷の事を思い出してしまったので。」

「そうですね・・・それより徳川暗殺の妨害、この依頼を受けてくれますか？」

「礼はする、旅費もうちが出す。」

「ハヤテとナギがこう言った。そしてヒナギクはすぐにこう言った。わかりました。徳川は絶対にはさせません！」

第1幕（後書き）

作者「どうでしたか？第1幕。」

新八「んな事どうでもいい！」

マリア「私たちの出番はあるんですか！」

作者「ねーよ。」

新八・マリア「何イイイイイイイイ！」

作者「本当です。ってか出すつもりありません（笑）。」

新八「何が（笑）だアアアアアアア！」

作者「いやゝ実はこの話はシリアスメインでやって行こうかと思っ
てね。」

マリア「だから私たちは出ないんですか！」

作者「別にいーじゃん。混沌学院と混沌物語で活躍してるんだし。」

新八「よくねーよ！」

マリア「せめて後書きだけでも出番をください！」

作者「分かった分かった！だったら今後の後書きで時代設計とかそ
んなんやるから手伝え！いいな！」

新八「まあ・・・そのくらいだったら・・・ねえ。」

マリア「いいですね。」

作者「というわけでよろしく願いします！」

第2幕（前書き）

作者「というわけで第2幕始まります。」

マリア「大丈夫ですか？混沌学院と物語を連載しているのに。」

作者「銀風はだてじゃない！」

新八「どこのガンダム！」

第2幕

ヒナギクは依頼を受け取った後徳川暗殺を企てる一人の輩、野菜薔薇衛門という似子藩の老中を暗殺するため移動していた。

「ふう．．．まだつかないのね。」

移動し始めて早1日、目的の似子藩まではまだまだだ。ヒナギクは徳川が暗殺されたあとの世の事を考えた。戦国の世に戻り、罪のない人の命が犠牲になって行く．．．その事を考え、ヒナギクはまた歩き始めた。だが後ろから殺気を感じた。

「．．．誰？」

「誰って．．．俺だよ俺。」

声の主は銀時だった。

「あなた．．．どうしてここへ？」

「ハヤテとナギに何か心配だからついて行けって言われてよー。」

「そう．．．勝手にしなさい。」

ヒナギクはそう言って先へ進んだ。

という訳で似子藩に着いたヒナギクと銀時、彼らは情報を集めるため城下町を歩いた。そんな中、ヒナギクはどす黒い殺気を感じ城下町から離れの平野まで移動した。

「誰なのあなた達．．．。」

ヒナギクが声を出した後、後ろから黒装束の男が4、5人程現れた。

「．．．ふつ。これから死ぬお前に名乗る名は無い．．．。」

一人の男が背中の中のとった。それに合わせ、他の男達も刀を抜きヒナギクに襲いかかった。ヒナギクはすぐに刀をとり目の前の男を斬りつけた。斬られた男は悲鳴を上げ片膝をついた。次にヒナギクの目の前には刀を振りかざそうとした男が視界に入った。だが懷から手裏剣を放ち、見事男の腹に命中させた。

「野郎！よくも仲間を・・・！おい、応援を呼べ！」
「わかつ」

応援を呼ぼうとした男をヒナギクは一閃した。1対1となった戦場。強さと言えかなり圧倒的だ。男はただ声を上げ後ろに下がっているだけだ。しばらくして男は雄たけびを上げ刀をヒナギクに向け突進してきた。だがヒナギクはそれを軽くかわし、刀を男の首筋に当てた。

「勝負ありね。あなた・・・誰から私を殺せと言われたの？」

ヒナギクは男に聞いた。男は唸り声をあげヒナギクを睨んだ。

「く・・・そんなこと・・・口が裂けても言えるか！」

ガリッ！

男の口元から音が聞こえた。ヒナギクは察した。その男は舌を噛み、自ら命を落としたのだ。

「・・・くつ・・・まさか薔薇衛門の刺客か・・・」

ヒナギクは呟いた後刀を鞘におさめた。

ヒナギクは宿にいた。そこには銀時がいて、彼の体は血で少し汚れていた。

「銀さん・・・まさかあなたも襲われたの？」

「あー・・・その様子だとオメーも襲われたみてーだな。」

「ええ。おそらく薔薇衛門の刺客だわ。」

「はぁ・・・」

銀時は頭をかきながらため息をついた。

「奴らも俺らが命狙ってるって気付いてんのか？」

「そうみたいね。」

ヒナギクは布団を敷き近くに刀や手裏剣などの武器を置いた。

「な・・・何やってんだ？」

「今から寝るのよ。」

ヒナギクの一言で銀時は少し驚いた。

「寝るって・・・まだ昼間じゃねーか。」

「だから寝るのよ。城に潜入するのは深夜。だから今のうちに眠って今さっきの戦いで失った体力を補わないと。」

「そうか・・・そーだな。だったら俺も」

「銀さんは見張りをお願いします。」

ヒナギクは笑顔でこう言った後眠りについた。

「・・・えゝ？」

銀時は一人さびしくこう呟いた。

その日の深夜、ヒナギクは黒装束に着替え似子藩の城に潜入した。辺りの見張りを銀時に任せ、ヒナギクは単身城の裏口から潜入した。
「さて・・・薔薇衛門はどこかしら・・・？」

ヒナギクは忍び足で屋根裏を移動していた。もし屋根裏で敵忍者と遭遇し戦ったら自分の存在が下にばれてしまうのだ。そんな事を考えながらヒナギクは注意を払いながら移動していた。そして薔薇衛門らしき声が聞こえる部屋を見つけた。

「ここかしら？」

音を立てない様ヒナギクは耳を傾けた。

「ええ・・・じゃあもし徳川の暗殺がうまく行ったらそれ応答の報酬を・・・。」

下から薔薇衛門らしき人物の声が聞こえた。続けて身元不明の男性の声が聞こえた。

「ああ。しかし奴を殺したらの話だな・・・。」

「分かっています。」

「分かっている方がいい。」

会話を聞いた後、ヒナギクは口ウソくめがけてクナイを投げた。クナイは見事口ウソクの火を消し下から男性の慌てている声が聞こえた。音を立てぬようヒナギクは下に降り薔薇衛門らしき人物の首筋を刀で斬りつけた。

「グギャー！」

男性の小さい叫び声の後、倒れる音が聞こえた。」

「薔薇衛門殿？」

「動かないで。」

ヒナギクは男性の首元に刀を当てた。

「・・・忍か。」

「ええ。大丈夫よ、あなたは殺さない。」

ヒナギクはこう言った後、男性は小声で笑い始めた。

「殺さないか・・・、甘いな。」

「え？」

ガッツ！

腹に痛みを感じた。ヒナギクの腹に男の拳が入っていた。

シュツ！

風を切る音の後、左の頬に衝撃を感じ壁に吹き飛ばされた。男は殴った後、その一瞬のすきを見切りヒナギクに蹴りを放ったのだ。

「キヤア！」

「・・・どこからの刺客か分からないが・・・死んでもらう！」

男性が飛びあがる音が聞こえた。ヒナギクはその場から離れ、攻撃をかわした。

「ククク・・・貴様はあの血桜忍か・・・。」

「そうよ。だから何？」

「・・・あの事を知られては困るな・・・。」

「あの事？」

「気にするな、貴様はここで死ぬのだからな。」

ガキイ！

刀と刀のぶつかる音が響いた。ギギギ！と音がした後二人は後ろに下がった。

「・・・あなたも忍び？」

「いや・・・ただの侍だよ。」

「・・・それにしても忍びの技を随分熟知しているわね。」

「俺は忍者に詳しいからね。」

「まあいいわ。」

「そうだな、無駄話はこれでおしまいだ！」

男は懷から小刀を投げつけた。ヒナギクはそれを全て叩き落とした。

「もらったア！」

上空から声がした、男性が剣を下に構えこちらに向かって落下してきていたのだ。

「しまっ」

グサ！

ヒナギクの頭上に刀が刺さった。だがその姿はすぐに消えた。

「な・・・何イ！」

「甘いわね。」

ズブッ！

男性は自分の腹に何か違和感が生まれた事を感じた。触ってみると背中から刀が貫かれていたのだ。

「ククク・・・変わり身の術か・・・。」

「・・・死ぬ前に一つ聞かせて、あなた達は誰？」

「へへへ・・・一つだけ言わせてやるよ。俺達や・・・傭兵さ。」

男性はそう言って息を引き取った。

ヒナギクは騒ぎが起こる前に城から脱出した。

「任務達成か？」

近くの大木から銀時の声が聞こえた。

「ええ。薔薇衛門は始末したわ。」

「そうか・・・。」

銀時は紙を取り出し中を見た。紙には徳川暗殺をもくろむ輩の名前が乗っている。

「で、次はどこに行けばいい？」

「ちよっと待つてろ・・・ここから近くだと壱藩の二郎衛門が徳川を暗殺を狙っている。」

「そうね。じゃ、今すぐにいきましょう。」

「いいのか？疲れは」

「そんなの感じてないわよ。さあ、行きましょつ。」
二人は夜の闇に消えて行った。

第2幕（後書き）

銀皿とメガネと三十路メイドのいたい分かる歴史解説コーナー！

新八「誰がメガネだアアアアア！」

作者「いや〜こういうシリアスばつかだとギャグが恋しくなるよね〜。だから後書きだけでもお笑いを」

マリア「すみません・・・この三十路メイドって私ですか？というより私しかいませんよね？」

作者「え・・・あ・・・その・・・」

マリア「作者さん、私はこれでもピッチピチの17歳ですよ〜？」

作者「へ？37の間違い」

しばらくお待ちください

新八「ギヤアアアアア！」

しばらくお待ちください

作者「というわけで歴史解説コーナーを始めます。」

マリア「最後までよろしくお願いします。」

作者「この作品の舞台となるのは1615年です。ちなみにこの年には大坂夏の陣という大きな戦がありました。今回はその数ヶ月後です。」

マリア「そういえば徳川徳川といっていましたたが誰のことを指しているのですか？」

作者「今回言われている徳川は家康です。」

マリア「そうなんですか。」

作者「1幕でヒナギクの故郷が壊滅されたという話を言いましたがその理由は大坂夏の陣です。」

マリア「へー。」

作者「今回は家康暗殺を防止するためにヒナギクが戦っていますがその一年後に家康は病気で亡くなります。」

マリア「これから江戸時代が始まるのに・・・かわいそうですね。」

作者「・・・えー、江戸幕府が動き始めたのが大坂夏の陣の後ですが実際に江戸幕府を開いたのは1603年です。」

マリア「へー。」

作者「今回の解説は自己流で調べたものです。もし違うところやもう少し詳しい説明をしてくれる方がいたら感想の欄にてお知らせください。」

マリア「じゃあ、次もよろしく願いします。」

作者「はい、わかり」

新八「ぐふ・・・僕h」

ガシャン！

作者「じゃ、次の後書きにてお会いしましょう！」

第3幕（前書き）

マリア「作者さん・・・活動報告を見ましたがまた何か作品を作ってるんですか？」

作者「そうだけど何か？」

マリア「私の出番なりますよね？」

作者「マリアは多分あると思う。」

新八「じゃあ僕は？」

作者「・・・・・・・・第3幕始まりはじまり」。

新八「おい、何目をそらしてんだコラ？」

第3幕

一方江戸の町にて。人目がつかない橋の上に男性の惨殺遺体が発見され、町人達はここに集まっていた。

「オイオイ、こりゃヒデーな。」

「ああ、一体誰がやったんだ？」

「それより仏さんは誰だ？」

「あれ・・・？この顔って・・・幕府のお偉いさんじゃねーか？」

「本当かよ！」

「殺した奴は悲惨だな・・・何せ幕府の怒りを買っちまったんだからよー。」

人ごみの中、一人だけ黒い服を着た男が立っていた男は死体を見た後、少し笑みを見せ去って行った。

吉藩。ヒナギクは次の標的である二郎衛門の情報を集めていた。

二郎衛門は過去に豊臣家の世話になり心の底から豊臣家を慕っていた。だが関ヶ原の戦いで豊臣家は滅亡、その時彼は用事で遠出したため無事だったが滅亡した事を知り、深く徳川を恨んでいるという話だ。

「なるほど、こんな過去があつたら強く徳川を恨むはずだ。」

宿の部屋で、銀時がこう言った。

「ええ・・・今回は一筋縄ではいかないかもしれない・・・銀さん、今回はあなたにも協力をお願いしてもいいかしら？」

「ああ・・・下手したら俺らがもう動いているってあの二郎衛門も知ってるはずだ。」

「ありがとう。」

その後、二人は作戦を立てた。二手に分かれ二郎衛門を見つけ次第すぐに始末する。そしてすぐに脱出。制限時間は1時間、その間

に始末するのだがもし時間が過ぎてしまつたらすぐに脱出。というものだ。

「じゃあ今日の夜、この作戦を決行しよう。」

「ええ。」

会話の後、二人は寝ながら夜を待った。

一方、どこかの洞窟にて。江戸の町にいた黒い服の男がこの洞窟に入つて行つた。

「同志よ、拙者です。赤信衛門です。」

『赤信衛門か・・・入れ。』

奥から声が聞こえ、重たそうな石の扉が音を立てながら動いて行つた。赤信衛門と言われた男はその中に入つて行つた。

「どうだ？お江戸の町は大騒ぎだつただろう？」

「ああ。何せ幕府のお偉いさんの死体が小汚い橋の上にあつたからねえ・・・。」

赤信衛門は軽く笑いながらこう言つた。

「無駄話は止めろ。」

前に立つていた首領らしき男が声を上げた。

「スミマセン、青信衛門。」

「たかが幕府のクスを一匹殺したつて何も変わらない、いいか？我らの目的はあくまでも徳川家康の暗殺、そして世を再び戦国にさせるのだ。」

「そうですね・・・。」

「赤信衛門、貴様にはまた出かけてもらう。」

「またですか？」

「今度は黄信衛門も一緒だ。」

「奴ですか？あ奴は口数が少なくて任務がやりにくいですよ。」

「ゴチャゴチャ言つな。黄信衛門はそれなりに役に立つ。いいから連れて行け。あとほんの少しだが兵も連れてけ。」

「いいんですか？この前も兵士に薔薇衛門の所に行かせたら死んだ

「じゃないですか。」

「いいから連れてけ！」

男が怒鳴ったので赤信衛門は渋々と歩きながら黄信衛門と共に洞窟から出て行った。

夜中、ヒナギクと銀時は壱藩の城に潜入していた。城内に入り二人はすぐに別行動をとった。

「時間制限は1時間・・・余裕！」

ヒナギクはこう呟き颯の如く、屋根裏を移動していた。銀時の方も音を立てない様素早く移動していた。

「どこだ？二朗衛門って輩は・・・？」

銀時もこう呟き移動していた。

城内は意外と広く、探すのに苦労したが、ヒナギクは男性の笑い声が聞こえたのでその部屋を覗いてみた。そして会話が聞こえた。

「いやゝありがとうございます！これでまた一段と徳川打倒に近づきましたわ！」

「まだだ、まだ終わってません。喜ぶのは徳川を始末してからですよ、二朗衛門殿。」

「そうだな・・・早く死ねばいいな・・・あの偽善者め！」

ヒナギクは懷からクナイを出し口ウソクの火を消した。

「な・・・何だ！」

「く・・・曲者だ！であえ！であえ！」

下の二人が動揺している間、ヒナギクは音を立てぬように降り背中を刀を取り出し二人に斬りつけた・・・と思ったが足が動かなくなかった。いや、なぜか体中がしびれてしまった。

「しまった・・・！畏か！」

「フッフッフ・・・貴様が血桜忍か・・・。」

声が聞こえた。

「気付かなかったのか？この部屋の屋根裏には肉眼では確認できない毒針が設置されていた事を・・・。」

ヒナギクの意識が段々と遠ざかって行つた。

「あなた方のおかげです。赤信衛門様。」

「いいつてことよ・・・クックク・・・。」

男達の会話が段々と遠ざかっていき、ヒナギクは気を失つた。

一方銀時の方は。

「ヒナギクの道の方が正解だったか・・・。」

城内を一通り調べ終わり、銀時は後ろに戻って行つた。だがその時、殺気を感じた。後ろを見たら自分より巨大な体の男が巨大な腕を振り上げていた。

「な・・・何だこいつ」

ドギヤア！

男が巨大な腕を銀時目がけ降りおろしてきた。銀時は間一髪攻撃をかわしたが男は銀時目がけ両腕を広げながら突進してきた。攻撃範囲が広すぎる、銀時はそれでも避けようとしたが男の右腕が頭に命中した。

「グアア！」

銀時は壁に叩きつけられた。男は銀時を壁に追い込み、雄たけびをあげて銀時を殴りつけた。

「グフォオオオオオオ！」

何回も殴りつけた後、男は両腕を振り上げ思いつきり銀時にたたきこんだ。その攻撃は裏屋根の床を貫き、銀時は舌の部屋に落下した。

「グフツ！・・・こいつは・・・ヤベーな・・・早く・・・あいつと合流」

逃げようとしたが突然と辺りが少し暗くなった。不審げに思い上を見て見ると男が銀時目がけ落下してきていたのだ。

「ヤベッ！」

銀時は逃げようとしたが足に激しい痛みを感じた。足を見て見るとんでもない方向に足の骨が折れていた。

「嘘だろ。」

その直後、男が銀時の上に落下した。

「う．．．ん．．．」

ヒナギクは寒さを感じ、目を開いた。辺りは暗く、何もない。

「お目覚めかな？くノーさん？」

赤信衛門が闇の中から現れた。

「誰？」

「誰？ケケケ、かなり強気な譲ちゃんだな．．．だが．．．今の状況を
見て強気でいられるかな？」

ヒナギクは自分の体を見た。忍び衣装ははぎ取られていた。つまり今の状況、ヒナギクは禪と小さい胸当てだけだった。

「な．．．何をするの！」

「決まってるだろ．．．」

赤信衛門は懷から鋭くとがった針をいくつもとりだした。

「貴様の体に聞くのさ！貴様が誰に雇われたかを！」

パラ．．．パラ．．．

天井が崩れたせいで木の破片が下に落ちて行く音がかすかに聞こえる。あまりの痛さで銀時は何も感じない。

「グアツ、グアツ、グアーハツハアアア！」

男の笑い声が耳に響く。その後、男は再び腕を振り上げ銀時を殴りつけた。

（ヤベエ．．．このままじゃ．．．死んじまう．．．）

薄れゆく意識の中で銀時はこう思っていた。

（ここで．．．死ぬのか．．．俺。）

そんな事を銀時は思っていた。そんな中でも男は銀時を殴り続けていた。

一方、城の外。少し離れた所に2人組の少女が立っていた。

「この城に入って行ったんだね。」

「そうアル。」

「うー・・・久しぶりに会うなー、ヒナさん元気かなー？」

「会ってみれば分かるアル、そんな事より早くいくネ。」

会話の後、二人の少女は城の中に入って行った。

第3幕（後書き）

銀皿と眼鏡（新八）と美しいメイドさんの歴史解説コーナー

眼鏡（新八）「オイイイイイ！前回と後書きのコーナー名が変わってんじゃねーかアアアアアア！美しいメイドって何だアアアアアア！」

作者「というわけで解説を始めます。今回は第1幕で出てきた三千院家の奴らと徳川の間係を書きます。」

マリア「というわけでよろしく願いします。」

作者「三千院藩は三河以来徳川の家来でした。そのため城がある場所江戸より近くです。ちなみに家康は大名を3つにクラス分けしました。」

新藩：徳川一族

譜代：三河以来徳川の家来 三千院藩はこれに値する

外様：関ヶ原の戦い以後徳川に従った大名の事

です。」

マリア「いろいろと細かいですね。」

作者「確かにそうですね、詳しくは歴史に関する本や漫画を見てください。ではまた次回お会いしましょう。」

第4幕（前書き）

作者「血桜忍、第4幕。はーじまーるよおおお！」

マリア「この作者が書いたハヤテ君とナギの恋愛物語も見ていっ
てくださいね。」

作者「おいちよつと、それ酷くない？」

第4幕

ヒナギクは捕まり、銀時は重傷、それぞれ危機に面していた。

「キヤアアアアアアアア！」

「ひーひっひ．．．若い娘の泣き叫ぶ声は実にすばらしい．．．。」

ヒナギクの体に何本もの針が刺さっている。そして針からは鮮血な血が流れている。

「どうだ？言う気になったか？」

「ぜ．．．全然！」

「ククク．．．ならば数本追加だ！」

（オイオイ．．．これまじいんじゃねーか？何も感じねーし、何も聞こえねー、で、目の前は白黒だ．．．。まだ俺．．．殴られてんのかな．．．？）

銀時は男に殴られ続けられ、瀕死になっていた。

「．．．．．！！！」

（何言ってるんだコイツ？どんだけ叫んでも俺には何も聞こえねーっつーの。）

男は叫んだ後、また銀時を殴り続けた。

一方ヒナギクの方は。

「チッ！しぶとい女だ！いい加減にしるよ！」

「フツ．．．それはあなたの拷問の腕が下手だからじゃないの？」

ヒナギクは赤信衛門を挑発した。

「言っただな．．．？この野郎．．．！」

そう言つと懷から黒い針をとりだした。

「こいつは猛毒を持った針だ。こいつに刺されたらひとたまりもないぜ。」

赤信衛門はヒナギクに近づき右胸の辺りに針を刺した。

「ウツ！」

「クツクツク・・・時期に毒がまわる・・・どうだ？雇い主の事を言う気になったか？」

「全然。」

「チツ！ならばこれでどうだ！」

舌打ちをした後、赤信衛門は禪の近くに針を何本も刺した。

「キャアアアアアアアアア！」

「ハーハッハー！どうだ！苦しいだろ！泣きたいだろ！」

「あ・・・あああ・・・」

余りの苦しさにヒナギクの目は涙が出てきた。

「ケツケツケ、泣かせる暇は・・・与えねエエエ！」

叫びながら赤信衛門はヒナギクの体に何本も針を刺し続けた。

「キャアアアアアアアア！」

「どうだあ！苦しいかア！ハッハッハアア！」

「あ・・・あああ・・・誰か・・・助け・・・て・・・」

その直後だった。かすかだが殺気を感じたのだ。

「誰だア！」

「あなたに名乗る名は無いよ！」

バキィ！

少女の声が聞こえたかと思ったら激しい打撃音と共に赤信衛門が吹き飛ばされていた。吹き飛ばされた赤信衛門は壁に命中した。

「ブエブン！」

「だ・・・誰？」

「久しぶりだね・・・ヒナさん。」

少女は顔に羽織っている布を取り出し素顔を見せた。

「あ・・・歩・・・！」

その少女はヒナギクの親友である西沢歩であった。

「き・・・貴様！よくも俺様の楽しみを！」

「その変な楽しみ、すぐに止めた方がいいよ！」

赤信衛門が毒針を西沢に向けて数本投げた。西沢は後ろにある日本の本の小刀を素早く抜き取り針を斬り落とした。

「キイイイイ！貴様、やるではないか！」

「喋ってる暇があったら身を守ったら？」

西沢はいつの間にか赤信衛門の横に移動していた。

「なっ！」

赤信衛門はすぐに反応したが遅かった。西沢の小刀は左手を切断したのだ。

「ガギャアアアアアアアアアア！」

「あなた・・・隙あり過ぎ。実践では不向きじゃないの？」

「だ・・・黙れエエエ！」

針を投げたが痛さでなかなか狙いが定まらない。

「チツクシヨオオオオオオオ！」

「終わりだね。」

西沢は小刀を鞘におさめ囚われのヒナギクの元へ寄って行った。

「ヒナさん・・・大丈夫？」

「え・・・ええ・・・何とか・・・」

ヒナギクは解放されたあと、その場に倒れこんだ。

「大丈夫！ねえ、本当に大丈夫なの！」

「ぐっ・・・小娘・・・何俺を無視しやがる・・・。それで勝った

つもりか？」

息を荒く吐きながら赤信衛門はこう言った。

「この状況でまだ戦おうって考えてるの？もう勝負はついたんだよ。」

「

「左手を失ったから俺の負けか？ふざけるな！まだ勝負は終わってねエエエ！」

赤信衛門は背中の刀を取り出し西沢に向かって突進をしたが軽かわされ、背後を斬られた。

「があ・・・がああああ・・・！」

声をあげ、赤信衛門は床に倒れこんだ。

「歩・・・無事だったのね・・・。」

「無事って？」

「里・・・崩壊したじゃ・・・子供のころに。」

「ああ・・・私達はその時修業の為に遠出してたの、だから助かったんだけど・・・ヒナさんも無事だったんだ。今は無事じゃないけど。」

西沢は懷から解毒剤を取り出しヒナギクに飲ませた。

「あ・・・ありがとう。」

「でも傷はかなりひどいよ。早く合流しないと。」

「合流？他に誰がいるの？」

ヒナギクはこう聞いたが少しして気を失ってしまった。

「ヒナさん？え？まさか毒のせいではわわわ！早くいかないとオオオ！」

気を失ったヒナギクを担いで西沢はその場から離れて行った。

一方銀時の方は。

「グガアアアアアア！」

巨大な男は未だに銀時を殴っていた。だが。

「ほあちゃあああああああ！」

小柄な少女がその場に乱入し、男の腕を蹴り飛ばしたのだ。男は飛ばされたあと、体制を整え何とか着地した。

「へっ、この私と戦う気アルか！やってやるアル！」

少女は戦う構えを見せ、男がどう動くかしばらくその場にとどまった。だが男は立ち上がってすぐに少女に向かって突進したのだ。少女は上に飛び上がり攻撃をかわした。

「隙ありアル！」

上空で構え直して少女は男の頭めがけてかかと落としを入れた。

「グギヤアアアアア！」

男は頭を抱えながら壁を突き破り外へ飛び出して行った。

「何だ、もう終わりアルか。」

「あ、いたいた。神楽ちゃん！」

「ん？お！西沢！」

神楽と呼ばれた少女は西沢の声がした方向に視線を移した。少しした後、ヒナギクを担いだ西沢が部屋に入って来た。

「そっちは終わったの？」

「今さっき終わったアル！ヒナギクは・・・ヤバイアルな。こっちの天パもヤバいけど。」

神楽は気絶している銀時の方を見た。神楽は銀時の所に近づき背中

中に背負った。

「よし、早速脱出するアル。」

「うん！」

西沢と神楽は男が開けた穴を使い城から脱出した。

第4幕（後書き）

桂魂！〜かつらたま〜

桂「ハッハッハ〜！読者のみんな〜、今から特別企画、桂魂が始まる」

作者「かあああああああああああああ！」

桂「ギヤアアアアアアアアアア！」

作者「これから忍者について説明しようとしたのに・・・何やってんだバカ！」

桂「今さっき貴様のパソコンのワードを見たが・・・血桜忍の話・・・俺も出番ないだろうがアアアア！」

作者「アンタマジで使いにくいんだよ！」

桂「エエエエエエエ！そんな事でエエエエ！」

作者「というわけで本当のおまけコーナーの始まりイイイイ！」

作者とバカ（新八）と美しきメイドとバカ（ヅラ）の解説コーナー
2バカ（眼鏡、ヅラ）「ちょっと待てえエエエエエエエエ！なんだこの扱いh」

作者「マリアさん、あの二人、マリアさんの事を三十路とかババアとかって言っていましたよー。」

2 バカ「え！ちよっ・・・」

マリア「ちよっと、いいですか？」

2 バカ「あ・・・あの・・・」

がちゅ・・・

しばらくお待ちください

ズゴッ！

グシャ！

バキィ！

作者「てな訳で始まります。今回は忍者について話します。今ジャンプでナルトが大人気ですが実際の忍者は今でいうスパイと同じようなものです。なので螺旋丸とか千鳥などは出しません。」

マリア「影分身や変わり身はどうなんですか？」

作者「多分使えなかったと思います。出来たとしても幻かなんかだと思います。」

マリア「これで子供たちの夢をつぶしましたね。」

作者「……………ええ。現実にはこんなものです。だからマリアも年齢をg」

ガチャ

しばらくお待ちください

バキィ！

ドシャ！

デデーン！

マリア「次もお楽しみに〜」

第5幕（前書き）

ヒナギク「かなり久しぶりね。私、待ってたんだから。」

作者「ハ・・・ハハハハ。」

ヒナギク「だってこれあなたが書く小説の中で私の唯一の主人公の作品だからいつ次の話があるかずっと待ってて」

作者「本編始まりまーす！」

ヒナギク「何私のお話を止めようとしな」

第5幕

赤信衛門は西沢にやられた後、隠れ家の穴に移動していた。

「あ．．．青信衛門様アアア！俺です．．．」

『どうした？』

「や．．．やられましたアアア！た．．．助けてください！」

『黄信衛門はどうした？』

「わ．．．わかりません．．．！逃げるので精一杯で。」

『まあ．．．とりあえず中に入れ。』

「わ．．．分かりました。」

その後、石の扉が開き赤信衛門は中に入って行った。

ここは人里離れた山奥。鳥の声でヒナギクは目を覚めた。

「．．．？ここは．．．？」

「あ！気がついたアルか！」

奥の方で神楽の声が聞こえた。その後、ドタバタと音がし少ししたら扉が開いた。

「やっと目が覚めたアルか！」

「神楽．．．あなた．．．無事だったのね！」

「おう！でもよかったアル！あれから三日たったアルから皆心配したアル！」

「皆．．．？」

しばらくして階段を下りる音が聞こえた。

「おう、ヒナギク。目え覚めたか。」

「ひ．．．土方さん！」

ヒナギクから土方と言われた男性は部屋に入りヒナギクの近くに座った。

「オメーもあの時無事だったのか。」

「え．．．ええ。」

「死んだかと思っただが・・・まさかオメーと会えるとはな。」

「私も歩に会って驚いた。まだ生き残りがいたなんて・・・他の皆は？」

「ああ、大丈夫だ。」

「くたばれ土方アアアアアアア！」

いきなり後ろから手裏剣とクナイの雨嵐が土方を襲った。

「おわアアア！」

「ま・・・まさか・・・！」

「またオメーか沖田アアアアアアア！」

その後、土方と沖田の盛大なケンカが始まった。

「ははは・・・土方さんも無事だったんだ。」

「ああ。俺は簡単にくたばんねーよ。」

「だがここにくたばるんだよ！」

土方はヒナギクの質問にこう答えたが後ろから沖田の反撃を食らった。

「もらったア！」

「何がもらったアアアアア！」

土方は沖田に向かって飛び蹴りを放った。

「ははは・・・あんまり変わってないね。」

「あー、そう言えば一緒にいた白髪の男は誰だ？」

「ああ・・・それは。」

ヒナギクは徳川暗殺を阻止するために任務を背負った事を土方達に話した。

「そんな事を考えるバカがいたもんだな。」

「ええ、本当ね。でもそれを阻止しないとまたこの世が戦国に逆戻りよ。」

「そうだな。けどよー、お前は誰が徳川を暗殺するか分かってんのか？」

「それは・・・その・・・」

ヒナギクは今気付いた。各地の藩の老中や権力の強い人物が徳

川暗殺を狙っているのだが彼らを一体どういう風にして操ったのか分からないのだ。

「・・・今の話を聞いて俺はある組織を睨んでいる。」

「ある組織？」

「お前はしらねーのか？戦国時代とある傭兵の集団がいるってよー。」

「傭兵の集団・・・？」

ヒナギクはここで思った。もしその集団が戦国時代を終わらせた徳川を憎みそれで・・・。

「まさか私達を襲った集団って・・・」

「・・・多分傭兵の集団の一部だな。」

しばらくしてヒナギクは立ち上がった。

「もう行くのか？」

「ええ。もたもたしてられないわ。」

「だが連れの天パの男はどうすんだ？かなり重症だぞ。」

「銀さんが・・・」

「ああ。体中の骨がボツキボキに折られていた。まだ寝ているぞ。」

「そう・・・。」

ヒナギクはここで黙り込んだ。

「じゃあ一体どうすれば・・・早くしないと連中が動きを・・・。」

「そうだな・・・だがそうすぐに動きはしないだろうが・・・だがその前に始末したいってか？」

「ええ。早めに倒さないかね。」

「だがお前も休んでおいたほうがいい。まだ毒が体に残っているからな。」

「そんな事はどうでもいい、早く行かないと・・・」

慌てて体を動かせようとしたが何故かよろついた。

「ほら言った通り。しばらくここで休んどけ。」

という訳でヒナギクはここでしばらく休む事となった。

隠れ家の穴。今ここで赤信衛門と銀時と戦った巨大な男が座っていた。

「青信衛門様、行動は何時に致しますか？」

「・・・時は今から一週間後、我らの全戦力を持って江戸城へ攻め込む！」

「分かりました。じゃあ今からどうしますか？」

「・・・戦いに備えて休んでおけ。貴様も斬られた左手が痛むだろ・・・。」

「は・・・心配いただきありがとうございます。」

「ふ、分かったら治療に専念しろ。」

「は・・・はい。」

赤信衛門は返事をした後治療室へ行った。

「・・・黄信衛門もよくやった。貴様もしっかり休んでろ。」

「ぐ・・・グガアアアアア！」

巨大な男、黄信衛門は雄叫びを上げた後自室へ戻って行った。彼らが去った後、青信衛門は一人小声で笑いだした。

「あと少し・・・あと少しで混沌の戦国に逆戻り・・・クッククク・・・。」

第5幕（後書き）

お・ま・けコーナー！！

作者「皆さん！お久しぶり」

マリア「どうせ混沌学院や執事とお嬢様の恋物語でしょっちゅう顔出してゐるくせに。」

作者「……………ま……………まあかなり久しぶりになりましたが今回はオリキャラ3人を紹介したいと思います。」

マリア「次から始まりまーす♪」

赤信衛門

歳：大体30代半ば

性格：拷問好きの変態野郎

特技：拷問　一応剣の腕もすごいです。傭兵なので。

黄信衛門

歳：30代〜40代？

性格：凶暴

特技：ただ暴れることしかできない

青信衛門

歳：銀さんと同じくらい

性格：冷静、冷酷。野望のためなら何だってする。だって徳川の暗殺だぜ？

特技：剣技全般。これでも傭兵時代の時はかなり名の知れた傭兵だった。

作者「以上です。これからも頑張りますので応援よろしくお願いします！」

訂正・青信衛門の年齢を間違えてしまいました。2月19日の時点で年齢をなおしました。読者の皆さま、すみませんでした。

第6幕（前書き）

作者「第6幕、はーじまーるよー！」

マリア「皆さん、見て下さいね。」

第6幕

戦いの傷を癒すため、ヒナギクは昔の仲間達の隠れ家で休んでいた。

「ヒナさん、体の調子見に来たよー。」

西沢が薬箱を持ってヒナギクの所へ来た。

「いつもありがと。」

「いいよお礼なんて、小さい頃・・・いつも助けられたから。」

西沢は小さい頃、まとも忍術を扱えずいつも怪我ばかりだった。ヒナギクはそんな事を思い出していた。

「まさかあなたに助けられるとはね・・・ありがと。」

「いいよ。そんなの。」

ヒナギクと西沢が会話していると扉が開き頭領のアテネが入って来た。

「ヒナギク、ちょっといいかしら？」

「どうしたの？」

「今あなたが請け負っている任務についてよ。」

アテネは手に持っている巻物を広げた。

「皆にあなたが戦った奴について調べさせているのよ・・・で、とんでもない事に気付いたわ。」

「とんでもない事？」

アテネは少し間をおいて喋った。

「奴らは戦国時代に名をはせたかなり有名な傭兵の集団よ・・・しかもかなりの戦いの達人・・・私達忍者よりも・・・多分。」

アテネの話を聞いた後ヒナギクは自分でいると考えた。もしあいつらが今回の事件を操っているなら全て話が合う。

「土方さんから話を聞いたと思うけど・・・大体あったよね。」

「・・・ええ。そうね。」

ヒナギクは荷物を取ろうとしたがアテネがその腕を止めた。

「待ちなさい、あなたとその連れの白髪の男の体調はまだ万全じゃないわよ。」

「でも」

「大丈夫。私達がいづらを調査するから・・・しばらくは休んで。」

「そうだよヒナさん！私達に任せてよ！」

西沢とアテネに促されもうしばらくヒナギクは休養する事となった。

1週間後、アテネの元に調査しに出かけていた忍達が戻ってきた。
「お疲れ様、様子はどうだった？」

「アテネ様、奴らは今まで何も動かなかった・・・だが本日になって雑兵らしき軍団が一斉に出かけ始めました。」

話を聞いてアテネは色々と考え始めた。そしてある考えを答えに出した。

「まさか・・・一気に江戸を潰す気じゃ・・・！」

「・・・もしそれが本当なら・・・」

アテネは座っていた椅子から立ち上がりこう叫んだ。

「今すぐに江戸へ！奴らは今すぐに動き始めます！」

一方傭兵達は。

「赤信衛門、用意はいいか？」

「万全です。」

「黄信衛門、お前も大丈夫か？」

「グガアアアアア！」

「大丈夫のようだな。」

赤信衛門と黄信衛門の前に座っている男が立ちあがった。

「では我々ももう少ししたら行くぞ。戦国の世の為に。」

男達はアジドから出てきた。赤信衛門の西沢に斬られた左腕は義手になっていた。黄信衛門は相変わらずデカイ体だった。そしてようやく姿を現した青信衛門の姿は銀時と同じ年くらいだが前髪がかなり長く、その髪によって右目が隠れていた。腰には長い刀があり、その横に小さな小刀があった。

「行くぞ、我らの野望の為に。」

3人の影が森の闇に消えて行った。

一方先に出て行った雑兵軍団は。

「江戸はまだか？」

「おいおい、青信衛門様の所から出てきてまだ1日もたってねーよ。」

「でもいいのか？周りにいた忍共をほっておいて。」

「ほっておけ、あいつらは青信衛門様のすごさに分からないんだよ。」

「そうだな。」

「ハッハッハ。」

一人が笑っているその時だった。突然音がし、周りが煙で一杯になった。

「な・・・何だ！」

「敵襲！敵襲！」

誰かが叫んだが聞こえるのは仲間の悲鳴だけ。誰だ？こんな事をしたのは？男の一人がそう思っていた、だが彼も何者かに斬られ命を失った。

「これで最後か？」

「そうみたいだな。」

忍者集団が敵を斬り捨てた後こう言った。彼らはアテネに命令され江戸に向かっている雑兵を倒せと言われたのだ。

「これで敵もかなり大苦戦のはずだ。」

「そつだな、後はヒナギクがいつ復活するかと・・・敵の親分がどう動くかな。」

「ああ、だがその前に戻るうぜ。」

忍者達はこう言った後姿を消した。

第6幕（後書き）

おまけコーナー

ヅラ「作者アアアアア！！何故俺を出さないんだアアアアア
！！」

作者「前にも言ったようにお前扱いにくいんだよ。銀魂の原作者み
たいにお前の暴走をうまく書けないんだよ。」

ヅラ「そうか、ならもつと小説を書け！そして俺を出せ！」

作者「まゝ次書こうとしている奴にお前の出番はあるから心配する
な。」

ヅラ「よっしゃアアアアアアア！！」

マリア「私の出番は？」

作者「考えております。」

新八「じゃあ僕は？」

作者「・・・・・・・・・・・・・・・・」

新八「オイコラ、何目をそむけてんだオメー？」

第7幕（前書き）

作者「そろそろ物語もクライマックス!!」

マリア「で、また何か書いてるんですか？」

作者「え・・・ええまあ。」

第7幕

青信衛門たちはアジドから出て、堂々と近くの藩の城下町を歩いていた。

「ちっ、どいつもこいつも平和ボケしてらァ。」

「赤信衛門、黙ってる。」

「あ、ハイ。」

「それよりも・・・あいつ等は江戸についたのだろうか・・・？」

その時、町娘の悲鳴が聞こえた。前方を見たら雑兵たちの死体が木の上につるされていた。

「・・・まさかあいつらが？」

「いや、血桜忍と白髪忍は俺らが重症にしたはずだ。」

「・・・協力者が・・・！」

青信衛門は悔しそうに呟いた。

「・・・先を急ぐぞ。」

その後、音を立てずに青信衛門たちは姿を消した。

ヒナギクは体に巻かれている包帯を取り、刀を取り手裏剣など装備品を身に付けた。

「行くのね。」

ドアの方からアテネと西沢が顔を出した。

「ええ、あいつらも雑兵を殺されてかなり慌てていると思うわ。」

「確かに・・・でも・・・一人で行く気？」

「・・・あなた達も行くつもり？」

「後ろの二人がね。」

アテネは後ろにいる神楽とアテネを部屋に入るよう促した。

「ヒナさん！一人じゃ無理だよ！」

「皆戦う気マンマンネ！私達もあのわけのわからない傭兵どもをぶ

「飛ばすネ！」

「皆も・・・。」

「徳川の一大事ネ！戦国の世に戻らされてたまるかってんでい！」
神楽はこう叫んだ。そして後ろから土方達が現れた。

「皆・・・いいの？」

「ああ。」

「皆戦う気マンマンですぜい。」

沖田は刀を土方に向けていた。

「オイコラ、誰に刀を向けてんだアア？」

「大丈夫でさあ、あの傭兵どもを倒したら次は土方」

「そうか、だったらオメーは今俺が倒してやらアアア！」

土方と沖田の喧嘩が始まった。だが彼らは奴らの喧嘩を無視した。
「私達は雑魚どもを相手するわ。だからあなたは幹部級の奴を相手にしてくれる？」

「ええ・・・。」

ヒナギクは大怪我を負った銀時の事を思った。全身の骨を折られ完全に戦闘不能になったのだ。

「ヒナ、あの銀髪の事を考えてるのね。」

「うん。銀さんは大丈夫なの？」

アテネは首を横に振った。

「完全に無理ね。復帰するまでかなり時間がかかるわ。」

「・・・そう。」

「何が無理だコノヤロー。」

扉の方から銀時の声がした。ヒナギク達は扉の方を見た。そこには銀時が立っていた。

「銀さん！大丈夫なの！」

「ああ。これでも無駄に体は丈夫だからな。」

「そう。じゃあこれで役者はそろったわね。」

ヒナギクは周りを見回した。誰もが戦う気マンマンの顔をしていた。

「じゃあ行くわよ！」

もう一方の傭兵の軍団は江戸の近くまで移動していた。

「まだか？あいつらは？」

「遅いな、予定の時間をとうに過ぎているぞ。」

「何かあったのか？」

「オイ、数名で班を組んで様子を見て来い！」

隊長らしき人物にそう言われ何名かが班を組み外へ出かけて行った。

「つたく、一体どこをほつつき歩いてんだあいつら……。」

「世話かけさせんじゃねーっつーの。」

「今頃雲の上を歩いてるのかしらね。」

愚痴をこぼしながら外を歩いていた。だが何もなくてすぐに宿に戻ろうとしたが一部不審なセリフがあった。すぐに不審人物に気付き背中にある刀を取ろうとした。だがその前に首元を斬られ絶命した。

「な……何奴！」

生き残った一人がこう叫んだ。彼の目の前には黒装束の忍、数名が立っていた。生き残った一人は服から草笛を取り出し仲間に合図しようとしたが時すでに遅く、自分の体は刀に貫かれていた。

「む……無念！」

結局彼もその一撃によって命を失った。

「ふう、まだ残りがいたなんてね……。」

「考えてもなかったな。」

アテネと土方はこう呟いた。だが少しして不審に思った残りの傭兵達がここへやって来た。

「……おいどうする？相手にするか？」

土方はおさめた刀を抜いてこう呟いた。

「……もちろん。」

アテネも服の中から手裏剣を取り出した。傭兵達も刀を構え、いかに襲いかかりそうな構えをとった。

「一気に決着をつけるわよ！」

「了解！」

忍と傭兵の戦いが始まった。忍達は一斉に煙玉を使い傭兵達の視界を奪った。

「防御の構えをとれ！殺されるぞ！」

「はい！」

傭兵達の声が聞こえる。だが耳にはシュツ！シュツ！と音がし、その後でグサツ！グサツ！と何かが刺さる音も聞こえ、仲間達の悲鳴も聞こえる。

「な・・・何だ！一体どうした！」

「傭兵つつつても案外もろいもんだな。」

「！」

ズシャアア！

すぐ近くで何かが斬られた音がした。その傭兵は仲間が斬られたと思い辺りを見回した。だがその直後、目まいが遅い意識が飛びそうになった。何か背中に違和感を感じ震える手で背中を触ったら又ルツとした。手を見たらそこには血がべっとり付いていたのだ。

「・・・・・・・・嘘だろ？」

これが彼の最期の一言となった。

「ふう・・・これでひと段落だな。」

土方は額の汗を拭きながらこう言った。目の前には傭兵の死体が転がっている。

「ええ・・・後はヒナギク達に任せましょう。」

アテネはこう言った。そして死体を片づけた後、忍達は姿を消した。

第7幕（後書き）

おまけコーナー

作者「ふう．．．やっと終幕まで書き終わった．．．」

マリア「え？もう書き終わってたんですか？」

作者「まーね。でも最後の最後ですごくおまけやるから。」

新八「どんなのですか？」

作者「それは．．．秘密です！！」

ヅラ「今言え！気になって眠れぬだろうが！」

作者「うるさい！ちなみにそれは最終幕の前に報告できたらします！では次回お会いしましょう！！」

新八・マリア・ヅラ「」「無理やり終わらせたアアアアアアアア！！！！」

第8幕（前書き）

作者「ついに青信衛門たちとの戦いが始まります！」

マリア「皆さんお楽しみにしてください。」

第8幕

ヒナギク、銀時、西沢、神楽は幹部級の傭兵を探していた。ちなみに幹部級の傭兵というのは青信衛門、黄信衛門、赤信衛門の事である。

「またあいつらと戦うのか。」

「そうみたいね。」

「・・・今度はあんな失敗はしねーぞ。」

ヒナギクと銀時はそう呟いた。

「今度こそは・・・倒す！」

一方青信衛門達は木の上で寝ていた。

「・・・殺気！」

「ん・・・？どうしたんですか？青信衛門様？」

「殺気を感じる。どうやら忍達のような。」

「あいつらか。また懲りずに。」

赤信衛門は武器を手入りした。

「また俺様が拷問してやる・・・ヒッヒッヒ・・・。」

黄信衛門は軽く雄たけびを上げた。

数時間後、ヒナギク達は人里離れた草原地帯に来ていた。そして武器を取った。

「・・・いる！」

「ああ。」

しばらくして青信衛門達が現れた。

「・・・そこをどけ。」

「ヤダ。」

「・・・ござかしい小娘・・・いや、血桜忍よ、ここを去れ。」

「ヤダ。というよりあなたが大将のようね。」

青信衛門は軽くうなずいた。

「・・・やけに素直じゃない。」

「これから貴様らは死ぬんだ。少しは優しくしないとな。」

「あら、天国へ行くのはあなたじゃないかしら？」

ヒナギクは長髪をした。しばらくの間、彼らは睨めあった。

「・・・来る！」

その後、彼らは3つの方向に分かれて行った。

西沢は走っていた。後ろには赤信衛門がいた。

「私の相手はこの前の拷問の人か・・・。」

後ろを見たら西沢目がけ何かが飛んで来た。西沢はそれを叩き落とし、何かを見て見るとそれは小さな針だった。

「俺の本気の武器を見事に叩き落とすとはな。」

後ろから赤信衛門が斬りつけて来た。だが西沢は左手の小刀を使い攻撃を払いのけ後ろへ飛んだ。

「へっ、結構やるじゃねーか！」

「あれ？左手治ったの？」

「これは義手だアアアアア！」

赤信衛門は右手の刀を振りつけた。西沢はそれを左側に避け右足目がけて斬りつけた。

「ちっ！」

「まだまだあ！」

西沢は体をひねらせ回転の斬撃をはなった。赤信衛門は剣を使い何とか攻撃を防ごうとしたが刀を弾かれてしまった。

「今だ！」

西沢は懐からいくつもの手裏剣を放った。だが赤信衛門は義手を使ってそれを払いのけた。そして義手から細い針をいくつも放った。
「な・・・何その義手！」

「色々と改造したんだよ！」

赤信衛門は義手にあるレバーを動かし中から数本の針が西沢目がけて飛びだして来た。

「うわっ！何これ！」

西沢は横に飛びながら針を避けていた。

「ならばこれはどうだ！」

突然赤信衛門の義手の手の部分が発射された。西沢は距離をとり何とかよけようとしたが義手は西沢を追尾していた。

「何これ！しつこいよ！」

何とか隙を見て西沢は義手を切断した。

「これで勝ったと思うな！」

赤信衛門は懷からもう一つの義手を取り出し左手に取りつけた。

「まだあるの・・・。」

「そうだ、左手を切り取ったお前を倒すまではな！」

赤信衛門は新しい義手から針を発射し始めた。西沢は全てを叩き落とした。だが。

ズブッ！

「う！」

西沢は脇腹に違和感を感じた。脇腹を触ったら。そこには小さい小刀が刺さっていた。

「しまった・・・！」

小さい悲鳴を上げた後、西沢は地面に崩れ落ちた。

「くつくつく・・・これで・・・俺の勝ちだ！」

赤信衛門は高笑いをした後、刀を高く振り上げ地面に倒れている西沢目がけて振り下ろした。

第8幕（後書き）

おまけコーナー

新八「オiiiiiiii！何だよ最後のあれEEEEEEE！」

作者「どうしたんだ眼鏡？俺は今マイソロ3やっついて忙しいんだ。」

マリア「・・・クリアしたんでしょう？」

作者「そうそう！まさか秘奥義でフレンがぎりぎり生き残ったんだよ！」

マリア「どうでもいいです。」

新八「それより最後の文章何だよあれ！」

作者「続きは次回で、という展開です。」

新八「なんだそりゃアアアアアアアアア！」

第9幕（前書き）

作者「今回は次回からの続きです。」

マリア「多分かなり気になった人がいるんじゃないですか？」

作者「では続きをお楽しみに。」

第9幕

荒野に風が吹いている。赤信衛門の足元には西沢の死体が転がっている。

「はん、俺に逆らうからこうなるんだよ！」

刀を鞘におさめ、赤信衛門はその場を去ろうとした。

「どうすっかな・・・青信衛門様は大丈夫だと思っし・・・黄信衛門の方に援護を」

ドスッ！

「む？」

赤信衛門は腹を見た。そこには刃が腹から貫かれていた。

「油断は大敵だよ。」

西沢の声がした。振り向くとそこには死んだはずの西沢が立っていたのだ。

「な・・・何故！」

「変わり身の術。あなたが針を飛ばした時に発動してたの。まあ少し針が刺さっちゃったけど。」

「刺さったなら・・・何故毒がまわらない！」

赤信衛門は苦し紛れにこう言った。

「私達忍者はいざという時にあらゆる毒に免疫をつけているの。だからあなたの罠にかかっても死ぬ事は無いよ。」

赤信衛門は軽い唸り声を上げた。

「グググ・・・この俺がこんな小娘に・・・」

西沢は背中にある刀をとり赤信衛門の首元に近づけた。

「これであなたの最期。・・・さよなら。」

西沢は勢いよく刀を振った。首元から鮮血な血が飛び出る。赤信衛門は悲鳴を上げたが徐々に小さくなり、やがて声が出なくなった。 「まず一人・・・ヒナさん達は無事かな？」

西沢はヒナギク達が戦っている場所を見つめた。その後、援護に行く為その場を離れた。

銀時と神楽は黄信衛門を相手していた。黄信衛門は巨大な腕を振りまわし、攻撃していた。だが二人はそれを難なくかわしていた。
「あん時は不意食らったが・・・。」

銀時は振り下ろされた腕の動きを見極め黄信衛門の太い腕に刀を突き刺した。

「今はそんな事しねーよ！」

「グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

黄信衛門は刀を差された腕を抱え暴れまわった。

「何やってるアルか！一氣にぶった切った方がよかったじゃないアルか？」

「るっせー！隙がなかったんだよ！」

その時、怒った黄信衛門は怒りの雄叫びをあげて二人に襲いかかって来た。

「おい、いいか、二手に分かれてあいつを倒すぞ！」

「了解アル！」

銀時と神楽は二手に分かれ黄信衛門に挑みかかった。

一方ヒナギクは青信衛門と睨めあっていた。

「・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・あなたが傭兵達の首領みたいね。」

「・・・・・・・・・・ああ。」

青信衛門がこう言った後しばし間が空いた。

「・・・・・・何でまた戦国の世に戻そうとするの？それだけ聞かせて。」

「・・・・・・俺と戦え。」

「え？」

「俺と戦い貴様が同等の力を持つ者なら答えてやる。」

青信衛門は刀を抜いた。その様子を見たヒナギクも背中から刀を

抜いた。

「・・・はっ！」

ヒナギクは気合を入れた後、姿を消した。

「流石に早いな。」

青信衛門は刀を鞘に納め居合いの型をとった。

「・・・！！見切ったあ！」

青信衛門は神速の早さで刀を抜いた。だが目の前にいたヒナギクは幻だった。

「きえええええい！」

背後からヒナギクの声がした。

「甘い！」

青信衛門はそのまま二撃目の斬撃を放った。斬撃はヒナギクの頬をかすった。

「・・・やるわね。」

「俺の二撃目をかわすとはな・・・やるじゃないか。」
距離をとりヒナギクは頬をこすった。

「あなたもなかなかやるじゃない。流石傭兵ね。」

「クツクツ・・・裏で噂の血桜忍にこう言われるなんて・・・光栄だね。」

「別に褒めてないけどね！」

ヒナギクは言葉と共にものすごい速さで青信衛門へ向かって行った。

「さあ来い！俺が血に染めてやる！」

青信衛門も刀を持ちヒナギクに向かって走り始めた。

銀時と神楽は黄信衛門相手に多少苦戦していた。何故なら斬っても斬っても相手にダメージは通らない。痛さで動きが鈍る様子もない。

「何だこいつ、本当に攻撃が効いているよな？」

「知らないアル、でも持久戦になったらこっちが不利アル！」

神楽は黄信衛門の攻撃を避けながらこう言った。

「ちっ、こうなったら一気に首んとこまで走って斬るしかねーな。」

銀時は攻撃のタイミングを見て黄信衛門の腕に着地し首元目掛けて走りだした。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「おおお！カッケーアル！これで一気に勝負を」

ドカー！

黄信衛門は蚊を叩くように首元にいる銀時を叩きつぶした。だが銀時も刀を攻撃を防いだ。しかしバランスを崩し地面に落下した。

「ウギヤース！」

「大丈夫アルか？」

銀時は腰を押さえながら立ちあがった。

「ウギヤアアアアアアアアアアアアアア！」

黄信衛門は雄叫びをあげ二人向かって突進を仕掛けた。

「くっ、銀髪！言ったん分かれるアル！」

「分かれるって・・・オブワッ！」

神楽は銀時をけっ飛ばした。だがこれにより見事突進を回避できた。

「タタタ・・・いつてーなコノヤロー！」

「仕方ないアル。・・・それよりいい考えが浮かんだアル

！」

「考え？」

銀時は攻撃の隙を見て神楽の元へ向かった。そして神楽の考えを聞いて銀時の顔は真っ青になった。

「・・・本当にやる気なの？」

「うん。」

「これしかねーの？」

「うん。」

銀時は嫌な予感しかなかった。

第9幕（後書き）

おまけコーナー

銀時「オイコラ作者アアアアアアア！次回どうなるんだアアアアアアアアアア！いやな予感しかないだろうがアアアアアアアア！」

作者「いきなり出てきて叫ぶなよ。」

銀時「お前さあ、俺の扱いひどくね？この作品でも全身の骨ボツキボキにされたり混沌学院でもいろいろ気絶したりブツ飛ばされたり・・・で、ツンデレ姫の冒険でも俺怪我ばっかじゃねーか！」

作者「それは仕方ない。」

銀時「仕方なくねえええええええ！」

新八「銀さん・・・アンタの方はいいよ・・・出番があるだけ・・・。」

マリア「私たちなんか後書きと前書きしか出番ないんですよ。」

ツラ「欲張りすぎだろお前は・・・。」

銀時「黙れ出番ナツシーズ！俺は主役だから」

新八・マリア・ツラ「・・・くたばれエエエエエエエ！」

銀時「そこで怒るの！・・・グフオ！アアン、そこはやめてえ！ちよ、マリア！お前どこ引っ張ってん・・・」

ブチィ！

銀時「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

作者「次回もお楽しみに。」

第10幕（前書き）

マリア「ついに2ケタに行きましたね。」

新八「すごいですね！10話ですよ！10話！」

作者「何でオメーら喜んでんだ？次回最終回だぞ。」

新八・マリア「な……何イイイイイイイイイイ！」

第10幕

銀時は神樂の案に乗るしかなかった。何故なら今この状況、こうするしかなかった。黄信衛門の身長は自分達の身長を軽く超えている。今でいう10mくらいなのだ。

「準備はいいアルか！」

「あ・・・ああ。」

神楽の足元にはしゃがんでいる銀時がいる。

$$\begin{matrix} \top \\ 1 \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \bot \end{matrix}$$
$$\begin{matrix} \neg \\ 2 \\ \text{の} \\ \cdot \\ \cdot \\ \cdot \\ \neg \end{matrix}$$

「さアアアアアアアアアアん！」

神楽は勢いよく銀時を蹴り飛ばした。

[illegible]

銀時は雄叫びをあげながら吹き飛ばされていた。だけでも銀時は何とか体制を整えて刀を前に向けた。そして刀を黄信衛門の首元に突き刺した。

「あ……アギヤアアアアアアア！」

首元を刺された黄信衛門は雄叫びをあげた。ダメージはとったか分からない。だが致命的な一撃を当てたのは確実だ。

「ど……どうだ？」

暴れる黄信衛門から何とか離れまいと力を入れて刀を握った。少
 して黄信衛門の動きが鈍くなってきた。そして黄信衛門の動きは
 完全に止まった。

「し・・・死んだか？」

「……みたいアルな。」

神楽は黄信衛門の死体をつついてこう言った。

「神楽ちゃん！」

向こうの方から西沢が走って来た。

「西沢ー、こっちも終わったアルかー？」

「うん・・・少し戸惑ったけどね。」

彼らはヒナギクが戦っている方を見た。

「援護に行くか？」

「たりめーよ。」

「じゃあ行くアル！」

三人は走ってヒナギクの元へ向かった。

ガキイイイ！

刀と刀のぶつかり合いの音が響いた。砂煙の中、刀を交えるヒナギクと青信衛門の姿が見えた。

「やるな、血桜忍！」

「あなたに褒められても嬉しくないわ！」

ヒナギクは刀を振り払い距離をとった。

「ふん、何だ？近距離線が嫌いなのか？」

「ええ・・・そうよ。」

ヒナギクは懷から手裏剣を放った。だが青信衛門は冷静に手裏剣の動きを見切り刀で叩き落とした。

「・・・何だ？命が惜しいのか？」

「そうよ。私もこの歳で死にたくないからね。」

しばらくの間、にらみ合いが続いた。青信衛門は刀を鞘にしまい居合いの型を取った。

「・・・ハッ！」

ヒナギクは手裏剣とクナイを一齐に青信衛門に向けて投げた。

「・・・無駄だ！」

「なっ・・・！」

青信衛門は一瞬のうちにヒナギクの背後に回っていた。

「ここで貴様を斬る！」

「・・・無駄よ！」

青信衛門は刀を振った。だが斬ったのは空だった。

「い．．．いつの間に．．．！」

「ここよ。」

空の方から声がした。見上げるとヒナギクが刀を振りかざしていた。青信衛門は追撃の一振りを放ったが攻撃と同時にヒナギクの姿は消えた。

「く．．．！」

「よそ見は禁物よ。」

ズシャアアアア！

ヒナギクに斬られた音がした。背中に違和感を感じた。同時に強烈な目まいが青信衛門を襲った。そして意識が途切れ途切れになるのを感じ始めた。

俺は．．．死ぬのか．．．？こんな所で．．．野望を果たせずにか．．．？再び戦国の世にし．．．俺達が再び活躍する．．．世の巻き戻しの野望を果たせずに．．．

途切れ途切れの意識の中、青信衛門はこう思っていた。

「ヒナさん！」

離れた方で西沢の声が聞こえた。それは瀕死の青信衛門の耳にも届いた。

「歩！それに神楽と銀さんも．．．。」

「こっちは終わったアル！」

「何とかこの前やられた分は返したぜ。」

やられ．．．た．．．？赤信衛門と黄信衛門が．．．？

青信衛門は薄れゆく意識の中でこう思った。そして腹の奥底から雄叫びをあげた。

「え？」

「嘘だろ？」

「まだ生きてるの？」

西沢達は驚き後ろへ下がったがヒナギクは刀を持ちなおした。

「貴様ら・・・きさ・・・ま・・・ら・・・！よくも、よくもよくもよくもオオオオオオオオオオオオ！」

青信衛門は怒った。信じる仲間を殺された事に、自分の野望が妨害された事に。

「殺す・・・貴様らは殺してやるウウウウウ！」

「皆・・・ここは私に任せて！」

突進してくる青信衛門に対してヒナギクは刀を構え青信衛門に立ち向かった。そしてヒナギクと青信衛門の戦いが再び始まったのだ。

第10幕（後書き）

おまけコーナー

新八「オiiiiiiii！次最終回ってどういうことだよ！」

作者「オメー・・・俺が一番初めにかいたツンデレ姫の物語って読んだことある？」

新八「ああ、僕が輝いていた作品」

作者「輝いてねーよオメー。」

新八「・・・・・・・・。」

マリア「どうして最終回なんですか？」

作者「大体このくらいをめどに計画していたんだよ。まゝもし血桜忍の次回作をやってほしいという声があったら次回作考えるけど。」

マリア「そうなんですか。」

作者「大体俺が考えている銀魂×ハヤテ！は大体10話くらいで読みやすい物語をイメージしているから。」

新八「え？じゃあ今後銀魂×ハヤテ！で僕が活躍するという話」

作者「一応いろいろな物語は考えている。その中でお前と数名が活躍する話も考えているけど実際に文章にできるかどうかわからない。」

」

新八「そうですか・・・じゃあいずれは」

作者「書けたらしっかりと考えて書く。」

新八「・・・ついに僕が主人公・・・フフフ」

作者「いっとくけど設定上お前はその作品の主人公のアシスト役だから。」

新八「・・・・・・・・・・」

最終幕（前書き）

作者「血桜忍、今回で最終回です！」

マリア「ついに青信衛門との戦いが終わります！」

新八「どうか見ていってください！」

最終幕

仲間を殺され怒った青信衛門。ヒナギクはそんな彼に立ち向かった。

「グオオオオオオオオオオ！」

「甘い！」

青信衛門の突きを上にかわして避け、ヒナギクは手裏剣を投げた。手裏剣は青信衛門に刺さったがそれでも青信衛門の動きは止まらなかった。

「何だよあいつ、怪物か？」

「・・・そうだね・・・今のあの人はまさに・・・怪物だね・・・。」

西沢はこう呟いた。今の青信衛門は理性を失いただ暴れている怪物と化していた。

「グオオオオオオオオオ！」

「チイツ！」

ヒナギクは何回も青信衛門を斬っているが青信衛門の攻撃は止まらなかった。彼が激しく攻撃するたびに体から流れる血がヒナギクや地面に飛び散る。

「これでどう？」

ヒナギクは刀を横に振った。刀は青信衛門の胸を斬った。それでも青信衛門の攻撃は止まらなかった。

「グアアアアアア！」

青信衛門は刀を投げた。だが刀はヒナギクに届かなかった。

「・・・もう無理ね。」

ため息をついたヒナギク。もう攻撃手段を失った青信衛門はヒナギクに向かって体当たりを放って来た。

「・・・これでおしまいよ。」

ヒナギクは刀を構え青信衛門の左胸に向かって刀を突き刺した。

ザシュッ！

刀は左胸を貫通した。左胸から血が流れた。

「グギヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

青信衛門は絶叫し地面に倒れた。そして倒れたまま動かなくなつた。

「・・・倒したのね・・・。」

「みてーだな・・・。」

ヒナギクは安堵の息を吐いた後その場に座り込んだ。そして神楽と西沢は歓喜の声を上げた。

数日後、ヒナギクは三千院城にいた。

「ヒナギクさん、任務ごくろうさまでした。」

「いいわよそんなの、江戸の危機だったから。」

ヒナギクは軽くそう言った。

「ありがとう・・・これは礼だ。受け取ってくれ。」

ナギは後ろにある小判をヒナギクに渡した。

「じゃ、私はこれで戻るわ。」

「え？もう？」

ハヤテはそう言った。

「私は自由気ままな忍、また用がある時読んでね。」

ヒナギクはウィンクし戻ろうとした。

「おい。」

ここで銀時が声をかけた。

「また会えたら会おうや。」

銀時は拳を突き出した。その後ヒナギクも拳を作り銀時の拳に当たった。

ヒナギクは三千院城を出た後神楽達の元へ向かった。

「ええ〜？ヒナギクもう行っちゃうアルか？」

「うん。一応私有有名な忍だから、結構依頼が来るのよ。」

神楽はふくれっ面になった。だが西沢は笑顔でこう言った。

「まあまあ、ヒナさん。またここに来てね。皆待ってるから。」

「ええ。そうよ。」

扉の方からアテネや土方達が現れた。

「もしよー、お前が困難な依頼を受けたら相談しろ。力になってやる。」

土方が力強くこう言った。その後、後ろにいる皆も微笑んだ。ヒナギクは彼らに見送られながらまた旅立っていったのであった・・・。

華やかで賑やかな江戸の町。しかしこの中に必ずと言っていいほど悪がいる。江戸の離れの宿屋にて、怪しい二人が会話をしていた。

「お代官様・・・これは黄金の饅頭です。」

「おお・・・裏顔屋・・・お主も悪よのう・・・」

「ヒッヒッヒッ。」

お代官は賄賂を受け取ったがその瞬間、明りが消された。

「何奴！」

シュッ！

何かを斬る音がした。裏顔屋の目の前には死体と化していたお代官の姿があつた。

「ひ・・・」

「お命頂戴。」

後ろから声がした。裏顔屋はすぐに反応し後ろを見たがその瞬間に首元を斬られた。

「・・・任務完了。これでおしまい。」

血桜忍・・・ヒナギクは刀を鞘にしまいこう呟いた。そして依頼主の元へ戻って行った。

ヒナギクの戦いはまだ続く。たとえ一つの悪を斬り捨ててもまた別の悪が影を現れる。だが彼女は戦いを続けるのである。そして今日もまた江戸の夜に血のついた桜が舞うのであった・・・。

最終幕（後書き）

おまけコーナー

新八「ついに終わっちゃいましたね。」

作者「ああ、結構長かったな。」

マリア「私たちの出番が結局ないまま……。」

作者「仕方ないじゃん。だってあんたらの出番考えてなかったんだもん。」

マリア「……（ブチ）」

作者「でも大丈夫。次の話では出すから。二人とも。」

新八「そうですか！よかったですねマリアさん！」

マリア「はい！……そういえば最後におまけが何かあると言いましたが……。」

作者「えーっと、そのおまけというのは混沌学院の特別版です。」

新八「……それかよ。」

マリア「……何だ……。」

作者「なんだその目は！」

混沌学院特別編：現実と理想はかけ離れている（前書き）

一方通行「・・・あれ？何で俺らが血桜忍のところにいるの？」

作者「出張特別編です。」

佐天「あゝ、それで。納得。」

銀八「それだけで納得できるのかよ・・・。」

黒猫「皆さん、見ていってください。」

混沌学院特別編：現実と理想はかけ離れている

毎度お馴染み22教室。全員の机の上に血桜忍の本があった。しばらくして銀時が教室に入ってきた。

「はいじゃあ今日の国語はついさっき完結した『血桜忍物語』についていろいろ話し合ってもらおう。」

クラス中にどよめきが走った。

「先生！」

ここで悟空が手を挙げた。

「どした悟空？」

「この小説何だ？」

「混沌学院と同じ作者が書いた忍者ものの小説だ。」

「あいつが？大丈夫なのか？」

「読めば分かる。」

悟空は席に着き本を読み始めた。

「先生、この本で土方は死にますか？」

ここで別の生徒が手を挙げた。・・・というか沖田がいつも通りの質問をした。

「いつも通りだなオメー。残念だが土方は死なない。残念ながら。」

「先生。何故残念を2回言うんですか？そして沖田のバカを斬っていいですか？」

「気にするな。あと沖田の件については勝手にしろ。」

「というわけでくたばれ沖田アアアアアア！」

「くたばれ土方アアアアア！」

教室の後ろで土方と沖田の喧嘩が始まった。

「先生。この小説は何がしたかったんですか？」

コレットが痛いところをついた質問をした。

「その質問は作者に言え。傷つくと思うけどな。」

「分かりました。という訳で作者さん。結局何がしたかったんですか？」

「・・・混沌学院やツンデレ姫の冒険で色々酷い目にあっているヒナギクを活躍させたかったからです。」

「分かりました。」

コレットはそう言うと言った。

「先生、この小説もハヤナギのカップリングが成立してましたね。しかも結婚してたし。」

マルタがこう言った。

「仕方ねーよ。この作者ハヤナギが好きだからよー。あとカラコイだっけ？ハヤテとナギのデュエット曲。あいつカラオケ行った時毎回歌ってたよ。」

「作者の事はどうでもいいです。」

マルタは銀時に向かってこう言った後席に座った。で、続いて御坂が手を挙げてこう言った。

「先生、後書きの歴史解説コーナーはどうなったんですか？後から普通のおまけコーナーになってたよね。」

「しゃーねーよ。だってネタがなくなっただけだからなー。」

「それ言っちゃあまずいんじゃないんですか！」

「・・・今言った事は無かった事に」

「出来るかアアアアアアア！」

御坂は叫んだ。

「先生！」

唯が手を挙げた。

「どしたー？」

「澪ちゃんが震えていまーす。」

唯が指さす方向には机の下に隠れていて震えている澪の姿があった。

「・・・おいどうした？」

「ひよ・・・表現がグロい・・・嫌だ。」

澪はただひたすら震えていた。

「先生、俺から質問があります。」

そんな中、サンジが銀時にこう聞いて来た。

「あん？」

「先生がこの小説を呼んだ感想は何なんですか？」

「ん~~~~~」

銀時は考え込んだがすぐに何かを思い出した。

「俺の活躍シーンだな。カッコよかったな俺。」

「おい！」

「いいじゃねーか自分で惚れちまったよ。流石銀さんだな。」

「自画自賛するな！」

「じゃあ俺が質問するけどオメーは何が心に残ったんだよ。」

銀時がサンジにこう聞いた。サンジはフッフッフと笑った後声高だかにこう叫んだ。

「俺はあの拷問シーンが心に残ったアアアアア！」

「何言ってるんだオメエエエエエエエ！」

銀時とヒナギクはサンジにむけて同時にドロップキックを放った。サンジは壁にブツ飛ばされて気絶した。

「あのシーンは私にとっても最悪なシーンなのよ……何であの作者はあんなの書いたのかしら……！」

あれは一種のサービスシーンという事

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

あれ？ヒナさん？

「目覚めよ正宗……目覚めよ……我が……ワガウチナルテンシ！」

ヒナギクはこう叫んだ後持つている木刀正宗に異変が起きた。正宗は光を放ち木刀からかなり長い太刀に変わった。そしてヒナギクの背中には一つの羽が生えて来た。その姿はまさに……

「せ……セフィロス！」

クラウドがこう叫んだ。その後クラウドはバスターソードを装備

しヒナギクに立ち向かった。

「ウオオオオオオオオ！ワタシハサービスシーンノタメニイルン
ジャナイ！ワタシハ・・・ハヤテノゴトクノヒロインヨオオオオ
オオ！」

「いや、ヒロインナギだから！」

クラウドはこう叫んだ後ヒナギクをつば競り合いを始めた。

「ハイじゃあ次の質問ない？」

「いいんですかあの人達ほっておいても！」

「いいんだよ。どうせいつもの事だろ？」

新八の魂の叫びの質問に銀時はこう答えた。

「後新八、オメー災難だったな。ツンデレ姫の冒険でも扱い酷かつ
たししかも本編でも出てこなかったし。」

「うるせーよ！黙ってる！気にしているんだから！」

「あ、そうですか！」

「だったら私はどうなるんですか！私本編どころか後書きと前書き
さえ出てませんでしたよ！」

新八の姉、妙がこう言った。

「じゃあ私はどうなるんですか！」

ロッカーの中からさっちゃんが現れた。

「うるせーよ！オメーは混沌学院でもあまり出てねーくせに！」

銀時はさっちゃんに向けて飛び蹴りを放った。で、さっちゃんを
ロッカーに入れた後出られない様に南京錠やら鎖でロッカーを封印
した。

「後この作者が続編を作るって言ってるけどどんなのですか？」

ミクが手を挙げてこう聞いた。

「あー、ここでいうけどまた銀魂×ハヤテの奴を書いてるらしい。
内容は・・・まさかのモンスターハンターだ。」

ここでざわめきが起こった。

「先生、本当にやるんですか？」

「俺に聞くな、作者に聞け。という訳で作者！」

ハイハイ。

「で、本当に書いてるのか？」

「そうです。というよりかなり前活動報告に書いた奴ですけどね。まーどんなのかは期待してて下さい。」

「分かりました。」

ミクはそう言って席に座った。

「せんせーい。もう一つ質問いいですか？」

リンがこう言った。

「どした？」

「この作者の作品で思ったけどマリアさんもあまり出てないよね。」

「たりめーだろ？あんな37歳のオバハンを」

ここでチャイムが鳴り響いた。

『銀時先生、マリア先生が体育館倉庫裏側で待っていると言っています。マリア先生の顔が非常に怖かったので早く来て下さい。』

この声を聞いた後銀時は冷や汗をかきながらこう言った。

「テメーら・・・無事であるよう祈つてくれ・・・。」

銀時はこう言った後教室を出た。少しして学院中に銀時の悲鳴が轟き響いた。そんな中、近藤が血桜忍の本を読み終わり一言つぶやいた。

「よくよく見たらトシや沖田が出てるのに・・・俺・・・出てねーじゃねーか・・・。」

近藤の目には涙が流れていた。

混沌学院特別編：現実と理想はかけ離れている（後書き）

おまけコーナー

新八「オiiiiiii！本当に混沌学院出しちゃったよ！」

マリア「いいんですかね・・・」

作者「俺の作品だからいいと思うけど・・・」

銀八「こっちはよくねーんだよ！」

梓「そうです！無駄に出張特別編とか書かないでください！」

当麻「そうだそうだ！こっちが迷惑なんだよ！」

グレイ・フォックス「俺たちはあんたの道具なんかじゃない・・・俺は最後まで自分の意思で戦ってきた。」

作者「グレイ・フォックスさん！名台詞をそんなところで言わないで！なんか泣けてくる。」

新八「で、何でこの人たちがいるんですか？」

銀八「たりめーだろ、俺たちは混沌学院の前書き後書きメンバーだからよ。」

マリア「へ・・・へへ。」

佐天「そういえばさ、次の作品書いてるの？」

作者「あの・・・本文に書いてあるけど・・・」

佐天「本当？・・・あ、本当だ。」

初春「でも大丈夫なんですか？モンハンの話を書いても。」

作者「俺をなめるんじゃないよ？それでも2ndと2ndGはかなりやってたからな。」

新八「どのくらいですか？」

作者「合計250時間以上はやってた。」

銀八「・・・それってすごいのか？」

梓「とある芸人の人はシリーズ合計4000時間を超えているとか聞きましたけど・・・」

作者「俺の場合はいろんなゲームに手を出しちゃうからだよオオオオオオ！」

新八・マリア「・・・こんな調子の作者ですけど次回作の応援をよろしくお願いします。」

銀八「おい！何終わらせようとしてんだ！俺からも一言言わせろ！今混沌学院で人気投票を開催中！皆アアアアアアア！俺に票を入れてくれエエエエエエ！」

作者「こんなところで人気投票の事を言うな！えー・・・今まで血桜忍を見てきてくれた方々、応援ありがとうございます。もし続編を望む声がある場合は続編を考えます！その時はまた応援をよろしくお願いします！ではまた次回作で会いましょう！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1370q/>

銀魂×ハヤテ！～血桜忍物語～

2011年3月15日15時10分発行